

白樺、カラマツ、赤松、檜や樫が生い茂る蓼科別荘地にも熊の目撃情報が出された。毎日歩く我が散策ルートにも現れたとのこと。鹿の群れには日常茶飯事のように出会う。一齐にキョトンとした可愛い眼をこちらに向け、十メートルほどに近づくまでは微動だにしないが、それ以上に近寄ると急に白い尻を見せて藪の中へ飛び込んでいく。熊には出会わないよう、杖に鈴をつけ携帯で行進曲を響かせながら歩いている。だが内心では熊を遠くからでもちよつと見てみたい気もする。

アイヌの有名な祭儀イオマンテでは熊を神として崇め、その肉を感謝しながら食べるという。先日 of 読書会で読んだ河崎秋子著『ともぐい』でも、名うての熊撃ち猟師とヒグマの大親分の間に生じる好敵手同士の闘争と相思相愛の心情を描いていた。たとえ相手に負けて、自身が食べられても悔いは残らないという互いの心境である。

話は変わるが、昨年暮れにご近所より赤い実がたわわに着いた南天の大きな枝を頂いた。埴生の山小舎では室内に飾る箇所も見当たらない。思いあぐねてペットボトルに挿しテラスの柵に取り付けた。これが当たり前！

窓越しに見ると、一面枯れ色の背景に対し鮮やかな赤が浮き上がり、正月気分を醸し出してくれる。それも花卉のようにすぐ萎むことはなく、いつまでも生気を保つ。だが一月半ほど経つと、葉は落ちて実が熟し黒ずんできた。

すると一羽のヒヨドリが飛んで来て、キョロキョロしつつ幾粒ずつ美味しそうに啄んでは飛び去っていく。何日か過ぎると実は一つ残らず綺麗になくなっていった。南天の枝にとっては人に観賞された後に、鳥に全てを賞味して貰い、幸せな一生だったろう。

それに引き換え、火葬場の電気炉で無機物のように焼かれて終わる現代人の何と哀れなことよ。非文明的と思っていたチベットの鳥葬が羨ましくなる。魂の抜けた肉体を自然に還し、最期に他者（鳥）へ施す仏教の神聖な「布施」なのだ。

南天か熊になりたいな。



